

1階・中央

床にあるのは、みんなのシンボルマーク。勝井三雄氏のデザインです。机は、ウメサオタダオが執筆用につかっていたものです。

1階・著作タワー

ウメサオタダオの著作集は全部で22巻とひとつ(年譜と総索引)。ここでは8つのまとまりにしています。1冊ごとに、所収されている本や論文を紹介しています。

1階・キャビネットタワー

ウメサオタダオは、現地調査をフィールド・ノートやスケッチブックに記録しました。それらの記録を整理するために、カードを最大限利用し、さらにちいさなメモをつかって、論理的なかんがえを文章にまとめていく独特の方法をあみだしました。くわしくは『知的生産の技術』(1969年)をお読みください。

日本研究 (第7巻+第17巻+第19巻)

戦後、海外調査ができなかった時期に、ウメサオタダオは日本各地を旅行し、日本に関する考察をふかめました。各地を訪問した記録類がこのまじりにあります。

比較文明学 (第3巻+第5巻+第9巻)

生態学の出発をいかして諸文明を比較した「文明の生態史観」(1957年)は、当時大きなインパクトを社会にあたえ、とりわけ、日本をヨーロッパと対等に位置づけた点が注目されました。5ヶ国語に翻訳され、世界的にも知られています。

中洋とアジア (第4巻+第6巻)

1955年のカラコラム・ヒンズークン学術調査隊や、1957年の第一次大阪市立大学東南アジア学術調査隊などは、サーベイ型のながめるフィールド・ワークでした。写真による記録と旅行記の記述がみごとに対応しています。

モンゴルとアフリカ (第2巻+第8巻+第10巻)

1944年から45年の中国内モンゴル調査や1963年から64年のタンザニア調査は、ステイ型のとどまるフィールド・ワークでした。フィールド・ノート、スケッチブック、収集資料などから、ウメサオタダオの民族学者としての出発点が見えてきます。

山と探検 (第1巻+第16巻)

ウメサオタダオにとって、山あるきは<フィールド・ワークの原点>でした。10代のころにつけていた登山日記、自作アルバム、スケッチ、フィールド・ノート、写真などの精緻な記録から、ウメサオタダオの原点が見えてきます。

ウメサオタダオゼミルーム

ウメサオタダオがみんなの館長を退官するときの記念講演(1993年3月)を1日3回上映しています。また、べつに、短い番組をコンピュータ画面で操作して自由に視聴するコーナーもあります。

ウメサオタダオ年譜

0歳から90歳までの年譜で壁一面をおおっています。ところどころにウメサオタダオの当時の発言をかかげてあります。そのころがどんな時代だったかを想像してみてください。

はっけんデジキャビ

自分のお気に入りのコーナーをカードに記入してください。記入された内容がデジタル・カードとして、デジタル・キャビネットにおさまります。投票結果の途中経過を見ることもできます。

ウメサオ検定

ウメサオタダオの写真コレクション20点をつかって、みずから問いを立てるようにして、ひらめきの訓練をしてみてください。

マルチメディア「ウメサオタダオの世界」

年表と地図からえらんで、展示資料をよりくわしく見るすることができます。

情報産業論 (第14巻)

1963年に書かれた「情報産業論」は、たとえばトフラーの『第三の波』(1980年)よりもはるかに早い段階で、産業史を見わたしていました。

文化開発と研究経営 (第13巻+第15巻+第21巻+第22巻)

ウメサオタダオは、みんなの創設に尽力しました。そのほかにも幾多の博物館の実現に協力しました。いまだ実現していない構想も少なくありません。

知的生産の技術 (第11巻+第18巻+第20巻)

『知的生産の技術』(1969年)は、ウメサオタダオが調査で得た情報をいかに整理するかという自身の体験をひろく読者と分かちあおうとしたものです。読者からの反響の手紙を読むと、社会にあたえた影響のおおきさがわかります。

